

國學院大學學術情報リポジトリ

J.W.ウォーターハウス《神託伺い》に描かれたテラフ解釈：
19世紀後半のヘブライズムの影響とラビ文学を踏まえて

メタデータ	言語: 出版者: 國學院大學 公開日: 2023-04-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Hommi,Risako メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000148

J.W.ウォーターハウス 《神託伺い》 に描かれたテラフ解釈

—19世紀後半のヘブライズムの影響と
ラビ文学を踏まえて—

本美里紗子

はじめに

ジョン・ウィリアム・ウォーターハウス (John William Waterhouse, 1849-1917) は、19世紀後半のヴィクトリア朝期のイギリスで活動した画家である。ウォーターハウスは1884年のロイヤル・アカデミー展に《神託伺い》(図1)を出品した。暗く不気味な雰囲気醸し出した室内には、画面左側に女性祭司、そして彼女を弧状に取り囲むように7人の女性たちが描かれている。画面奥の中央には、半円形の格子窓が描かれており、そこからはうっすらと光が差し込んでいる。女性祭司の足元には香炉が置かれ、その香りが漂う中、彼女は祭壇に置かれた黒い物体に上半身を傾けている。ウォーターハウスは『第116回ロイヤル・アカデミー展』のカタログにおいて、《神託伺い》についての言葉を添えている。

「神託を告げるもの、あるいはテラフは、香辛料で保存処理をした人間の頭部であった。それは壁に固定され、その前でランプを灯すとともに、他の儀式が行われ、古い師の想像力が大いに掻き立てられたので、彼らは未来の出来事を語る低い声を聞いたと思ったのである。」⁽¹⁾

上記の記述からすると、ウォーターハウスは「神託を告げるもの」と「テラフ」を同一視しており、「テラフ」が香辛料で保存処理を施した人間の頭部であると解釈している。テラフとは、画面左側で女性祭司が身を傾けていた黒い物体であり、『旧約聖書』に登場するテラフィム (Teraphim) の単数形である。テラフィムとは、家の守護神像や、神託を問うために用いたりする神像など、旧約聖書にみられる様々な神像の総称である。

《神託伺い》に関する先行研究では、作品の構図に関する考察やフラウィウス・

ヨセフス著『ユダヤ古代誌』の19世紀版が出版されている事実が指摘されている⁽²⁾。2008年にロンドンのロイヤル・アカデミー・オブ・アーツを中心に開催された『J.W.ウォーターハウス：モダンなラファエル前派』展のカタログでは、タルグム⁽³⁾偽ヨナタン (Targum Pseudo-Jonathan)⁽⁴⁾にみられるテラフィムの解釈や、20世紀のエリコの発掘調査を例に挙げて、『神託伺い』に描写されたテラフを考察している⁽⁵⁾。しかし、本カタログにはタルグム偽ヨナタンとエリコの発掘調査に関する文献が掲載されていないうえに、ラビ文学におけるテラフィムの解釈は複数存在するため、それらを精査する必要がある。加えて、テラフィムを描いた作品は、現段階で筆者が調べた限り、ロイヤル・アカデミーにおいてウォーターハウスの『神託伺い』以外に事例がない。

そこで本稿では、『旧約聖書』と複数のラビ文学にみられるテラフィムに関する解釈を整理した後に、19世紀英国におけるヘブライズムの影響を受けた文芸や聖書辞典を踏まとうえて、『神託伺い』の典拠となる文献とは何かを明らかにする。

第1章 ロイヤル・アカデミー展の動向

ロイヤル・アカデミー展の合否については、アカデミーの出品審査委員会が選考を行ったが、例えば1870年の選考に提出された作品は3510点で、そのうち1404点しか選出されておらず、狭き門だということが分かる⁽⁶⁾。1883年の『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』では、落選した芸術家たちの批判がロイヤル・アカデミーに殺到したとの記事が掲載されている⁽⁷⁾。多くの落選者がある中、ウォーターハウスは《ホノリウス帝のお気に入り》(図2)と《泡》⁽⁸⁾の2作で、同年のアカデミー展の狭き門を突破することができた。

ピーター・トリッピーは、『ホノリウス帝のお気に入り』を同時代のフランスの画家ジャン＝ポール・ローランス (Jean-Paul Laurens, 1838-1921) による《後期ローマ皇帝ホノリウス》(1880年) (図3) から着想を得ていると指摘している⁽⁹⁾。ローランスの場合は、褐色の肌をした少年ホノリウスを正面から描いているが、ウォーターハウスは成年のホノリウス帝を斜め左から捉えている。その足元には数羽の鳩がおり、画面右奥には皇帝に謁見する臣下たちが描かれている。両作を比較するとホノリウス帝は頭部に黄金の王冠を装着し、朱色の衣服を着装している点が類似している。《ホノリウス帝のお気に入り》は1883年のアカデミー展では衆目を集め、小さな作品ではあるが色彩の効果が高く評価されている⁽¹⁰⁾。

《ホノリウス帝のお気に入り》は、アカデミー会長のフレデリック・レイトン (Frederic Leighton, 1830-1896)⁽¹¹⁾による《子猫たち》、フランク・バーナード・ディクシー (Frank Bernard Dicksee, 1853-1928) が手掛けた《手選れ》など、ロイヤル・アカデミー展の注目作品と共に、5月12日付けの『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』に図版とその解説が掲載された⁽¹²⁾ (図4)。本記事の

下部には、ジョージ・ヘンリー・ボードン (George Henry Boughton, 1833-1905)、ハーバート・ギュスターヴ・シュマルツ (Herbert Gustave Schmalz, 1856-1935)、ルイーゼ・ジェーン・ジョプリング (Louise Jane Jopling, 1843-1933)⁽¹³⁾ による、女性を題材にした作品も見受けられる。レイトンによる東洋風の衣服を身につけた少女と子猫を描写した異国情緒ある作品や、ディクシーの『マタイによる福音書』25章における10人の乙女の逸話を題材とする作品⁽¹⁴⁾から、女性を題材にした風俗画まで当時のアカデミー展は幅広い主題の作品を選出していたことが伺える。

しかし1883年の展覧会カタログを見ると、会長のレイトンやローレンス・アルマ＝タデマ (Lawrence Alma-Tadema, 1836-1912)、エドワード・ポインター (Edward Poynter, 1836-1919)、ジョージ・フレデリック・ワッツ (George Frederick Watts, 1817-1904) など、古代ギリシア・ローマを題材に作品を手掛ける画家や、歴史画を得意とするウィリアム・フレデリック・イエームズ (William Frederick Yeames, 1835-1918) など、アカデミーの規範とする歴史画や古典的テーマを得意とする画家の名が列挙されている。特にレイトンとアルマ＝タデマは古典的、すなわち古代ギリシア・ローマに題材を求めた作品で一世を風靡していた。

フレデリック・レイトンは、フランクフルト、パリ、フィレンツェの美術学校で画法を学び、1878年から亡くなる1916年までロイヤル・アカデミーの会長を務めた。ヨーロッパ大陸で修業を積んだレイトンは、初期の段階において中世からルネサンス期を主題とする傾向が見受けられ、《フィレンツェの町を行列で運ばれるチマブーエの聖母像》(1853-55年)はその代表的な作品である。会長に就任した1878年に開催されたロイヤル・アカデミー展では、《糸巻き》(図5)と《ナウシカ》(図6)の古代ギリシア・ローマに題材を求めた2作を出品している。1867年にギリシアのロドス島を訪れたレイトンは、その経験に基づいてこの2作品を制作した。《糸巻き》はリンドス湾を眼下にテラスで糸巻きをする女性と少女を描いている。

「ハリウッドに靈感を与えた画家」や「ヴィクトリアン・ヘレニズムの画家」⁽¹⁵⁾という異名を持つローレンス・アルマ＝タデマは、オランダ出身の画家である⁽¹⁶⁾。アルマ＝タデマは、2回目の結婚を契機に二人の娘とともにイギリスに帰化する。1882年に画家は《神殿への道》(図7)と《西洋夾竹桃》(図8)の2作をロイヤル・アカデミー展に出品しており、特に前者はアカデミー正規会員としてのディプロマ作品である。《神殿への道》はディオニュソス祭の情景を捉えており、古代ギリシアの巫女がドーリス式神殿の前に座り礼拝用の小像を売っている姿が描写されている。巫女の背後には、酒の神ディオニュソスに仕えるマイナスたちによるディオニュソス祭の行進が描かれており、アルマ＝タデマが古代の遺物まで観察していたことが奉納品や赤像式陶器や鼎、ランプの正確な表現によく表れている⁽¹⁷⁾。

このような古代ギリシア・ローマを主題とする作品がアカデミーの重鎮により制作されていた事実は、画家としての地位を確立しつつあったウォーターハウスに刺激を与え、彼が《ホノリウス帝のお気に入り》を1883年のアカデミー展に出品する契機となったのではないかと推測される。そして、特にアルマ＝タデマと比較されることの多かったウォーターハウスは、その作品との差異化を図るために、翌年の1884年にはあえてヘブライの慣習を主題とした《神託伺い》を制作するという戦略を試みたと推測できる。

《神託伺い》は1884年のロイヤル・アカデミー展で展示されると、『マガジン・オブ・アート』や『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』、『アート・ジャーナル』など美術批評家による雑誌や新聞記事によって称賛を得た。『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』は、「考古学と歴史の綿密な研究が大胆な筆致と豊かな色彩とあいまってアルマ＝タデマ氏の追随者には滅多に踏み込めない域にまで達した」と本作を好評する⁽¹⁸⁾。

また、1886年の『マガジン・オブ・アート』では、雑誌の冒頭にウォーターハウスの特集が組まれており、画家の経歴やこれまでの代表的な作品を列挙している。この記事を執筆したブレイキーは、「《神託伺い》は大衆の喝采を得ようとする作品とは全く無縁であるが、確実に人気のある絵画のひとつである」としており、「青ざめた女性、顔を紅潮させた女性、そして神託に耳を傾け、何か謎を告げようとしている青ざめた巫女は、非常に個性豊かで真に人間らしく情熱の多様な表現が見事である」と評価している⁽¹⁹⁾。『アート・ジャーナル』ではウォーターハウスが子どもの頃からポンペイのフレスコ画の断片を大切にしていたことと作品に描かれた女性たちの仕草に注目している⁽²⁰⁾。

中でも特に注目したいのは、1884年5月31日付の『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』に掲載された記事であり、アカデミー展に展示中の《神託伺い》をヘンリー・テート (Henry Tate, 1819-1899)⁽²¹⁾が購入したことで特集が組まれたのである。その記事では『スミス聖書辞典』にみられる「テラフィム」の内容を引用して、作品に描写されたテラフがその一節から取ったものであると指摘されている。

この絵画は、J.W.ウォーターハウス氏によるもので、ロイヤル・アカデミー展の多くの来場者に賞賛された。[中略]「テラフ」という言葉は、シリア語で、質問に答える者、あるいは神託を意味する。前掲の『聖書辞典』によれば、「テラフィムの製作者は、長男を屠り、その頭を切り落として塩漬けにし、香辛料と油で保存処理をした。その後、金の板に不浄の霊の名と神妙な内容の文を書いて、その頭部の舌の下に置き、それを壁に固定し、その前に灯火を置き、ひざまずいて礼拝すると⁽²²⁾、舌が占いを口に始めた。」とある。テラフィムについては、同じ見出しの下に一つか二つのより短い記述がある。

そのうちの一つに、「テラフィムは人間の姿であり、占い師の想像力を大いに掻き立てられ、彼らは未来の出来事を語る低い声を聞いたと思った」とある。ウォーターハウス氏は、この場面を、劇的な集団に分け、姿勢や、表情で力強く表現しており、構図の配置と豊かで鮮やかな色彩の効果の両方が、この絵画を高い芸術的価値を持つものになっている。⁽²³⁾

[下線部は訳者による]

しかし問題となるのは、ウィリアム・スミス (William Smith, 1813-1893) が編纂した『スミス聖書辞典』については、類似した辞典が何冊も刊行されており、『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』の記者は正式な書名を明記していない。スミスによる辞典のうち、1884年までにロンドンで刊行されているのは、『古代・伝記・地理・自然誌からなる聖書辞典 (*A dictionary of the Bible comprising its antiquities, biography, geography, and natural history*)』(1863年)⁽²⁴⁾、『聖書の簡潔な辞書：古代の伝記、地理学、および自然史 (*A Concise Dictionary of the Bible: its Antiquities Biography, Geography, and Natural History*)』(1880年)の二冊である⁽²⁵⁾。だが、どの辞典も『旧約聖書』に登場するテラフィムに関する説明がほとんどで、『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』にあったようなテラフィムの保存処理方法に関する内容は見当たらない。

筆者が下線部を引いた『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』にみられる『スミス聖書辞典』の引用箇所と、ウォーターハウスによる《神託伺い》の作品説明には、類似点がある。両者とも、「テラフィムとは、塩と香辛料で保存処理をした人間の頭部」であり、「魔術的な文言を書いた金の板を、人間の舌の下に置き、その前に灯火を配置すると、テラフィムが予言した内容を話し始める」という点が共通しているのである。『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』の記者がウォーターハウスの記述を書き間違えたのかは定かではないが、両者は同じ文献を典拠として「テラフィム」に関する内容を参照した可能性が高い。ウォーターハウスが「テラフ」に関する知識をカタログに掲載した理由としては、ヴィクトリア朝の人びとの間ではその存在が広まっていなかったからだと推測できる。では、ウォーターハウスはどのようにして「テラフ」に関する知識を得たのだろうか。

第2章 テラフィム及びテラフの多義性—8世紀から12世紀のラビ文学

本章ではテラフィム及びテラフが多義的な意味を内包しているため、テラフィムの意味を確認してから、8世紀から12世紀の二人のラビによるテラフィム解釈を列挙し、その特徴を把握する。その上で、ウォーターハウスの《神託伺い》におけるテラフの描写とラビ文学にみられるテラフィム解釈の比較検討を行う。

テラフィム (Teraphim) は、聖書においては様々な神像の総称である。『創世記』31:19-35のヤコブ物語では、家長が所有する人形の小さな家の守護神像として登場している。そして、テラフィムを所有することは、家督相続権を有することを意味していた⁽²⁶⁾。続く『士師記』においても、偶像崇拜の対象としてミカの家の神殿で祀られている。

しかし、ヨシヤ王の時代になると、異教の偶像を廃棄する過程で、テラフィムも蔑視されるべき偶像の象徴とみなされるようになり、『列王記』下巻23:24では「ヨシヤはまた口寄せ、靈媒、テラフィム、偶像ユダの地とエルサレムに見られる憎むべきものを一掃した」⁽²⁷⁾と記されている⁽²⁸⁾。また『エゼキエル書』21:26では、「バビロンの王は二つの道の分かれる地点に立ち、そこで占いを行う。彼は矢を振り、テラフィムに問い、肝臓を見る」⁽²⁹⁾と記されるように、神託を問うためにテラフィムが用いられ、『ゼカリヤ書』10:2においても「テラフィムは空虚なことを語り占い師は偽りを幻に見、虚偽の夢を語る。」⁽³⁰⁾とあり、『エゼキエル書』と『ゼカリヤ書』において、テラフィムを用いて神託を伺う行為は、魔術と同一視されていたと分かる⁽³¹⁾。

以上の点を踏まえると、『神託伺い』に描写された「テラフ」の外観や機能に一番近いのは、『エゼキエル書』や『ゼカリヤ書』にみられる「魔術や託宣を下す役割」を果たすテラフィムである。20世紀のラビ学者ルーヴェン・ハイム・クラインは、8世紀から12世紀のラビによる、「テラフィム」に関する興味深い事例に着目している。その一つ目は『ミドラシュ・ピルケイ・デ・ラビ・エリエゼル (Midrash Pirkei de Rabbi Eliezer)』⁽³²⁾の記述、二つ目は、ラビ・トヴィア・ベン・エリエゼル (R. Toviah ben Eliezer) の著書『ミドラシュ・レカハ・トヴ (Midrash Lekach Tov)』における記述である⁽³³⁾。以下クラインに従い両者の当該箇所を記す。

第一に『ミドラシュ・ピルケイ・デ・ラビ・エリエゼル』に記されたテラフィムの解釈を下記に参照する。

第一の伝承は、『ミドラシュ⁽³⁴⁾・ピルケイ・デ・ラビ・エリエゼル』に見出され、人間の初子を（彼の前面と背後から⁽³⁵⁾）屠殺し、その頭を塩と油で漬けたと説明している。そして、金の板を取り、そこに不浄の霊の名前を書き、殺された初子の舌の下に置いた。最後に、その首を壁に貼り付けると、その首は彼らと話をしたのであろう⁽³⁶⁾。

第二の伝承については、11世紀から12世紀のギリシアのラビ学者、ラビ・トヴィア・ベン・エリエゼルによる著作『ミドラシュ・レカハ・トヴ』である。ラビ・トヴィア・ベン・エリエゼルは、11世紀から12世紀のカストリアで誕生したとされ、この地域は基本的には正教を奉じていたブルガリア帝国ないしはビザンツ帝

国の支配下にあった。

第二の伝承はラビ・トヴィア・ベン・エリエゼルの『ミドラシュ・レカハ・トヴ』に見出される。彼は、まず（死んだ？）⁽³⁷⁾人間を皮膚が溶けるまで何日も油に浸けたと書いている。そして、彼の頭髪を掴んで、頭と肺を体から切り離すように引っ張ったのだろう。その後、死体を立てると、その上に不浄の霊が休んでいるように見えたのではあるまいか。それは魔術によって未来を予言することができ、投げかけられたいかなる質問にも答えたであろう。⁽³⁸⁾

以上の2例を踏まえると、両者とも「テラフィム」の保存処理方法に触れており、またアポロンの神託のように、テラフィムは「未来を予言することが可能で、託宣を下す」という解釈をしている。『ミドラシュ・ピルケイ・デ・ラビ・エリエゼル』の記述では、「頭部を塩と油で保存処理を施す」という点と、「首を壁に貼り付けると、テラフィムが対話をする」という2点の指摘が、ウォーターハウスがロイヤル・アカデミーのカタログでテラフについて説明した内容と一致している。《神託伺い》に描写されたテラフは、闇に溶け込んでいるため、性別や年齢を判断するのは不可能であるが、『マガジン・オブ・アート』の挿絵を参照すると、画面左端に、祭壇の上に置かれた頭髪のないテラフの横顔が、くっきりと浮かび上がっている（図9）。

以上、2点のラビ文学が19世紀イギリスに伝わっていた可能性がある。では19世紀においてユダヤ・キリスト教、とくにユダヤ教に依拠するヘブライズムに關してはいかなる動向があったのだろうか。

第3章 19世紀英国の文芸と《神託伺い》

18世紀末にナポレオンがエジプトに遠征すると、大英帝国もフランスと同様に中近東へ進出する。1805年にエジプト総督ムハンマド＝アリーにより、エジプトはオスマン帝国からの独立を達成するが、財政破綻を迎えたことで1875年には大英帝国にスエズ運河（株）を売却し、英国が実質的に同地域を支配するようになった。そして、19世紀中頃から聖書にみられる聖地を探訪する聖書考古学的な動きが英国で起こる。1840年にはロンドン・ユダヤ協会の新しい伝道教会の建設のためにエルサレムで発掘が行われ、1865年に「パレスチナ探險基金」が発足して、ヴィクトリア女王がその後援者となる⁽³⁹⁾。定期雑誌『クォーターリー・ステートメント』やロンドンとリヴァプールで開催された展覧会、そして『西パレスチナの調査』（1881-84年）などの出版物によって、基金への出資者は調査の進展状況を知ることが出来る⁽⁴⁰⁾。

このような状況下で、ジョン・キットとジョン・ウェスリー・エサリッジという二人の聖書研究者が、自身の著書の中でテラフィムに関する重要な記述をしている。まず、ジョン・キット (John Kitto, 1804-1854) ⁽⁴¹⁾ 著、『聖書文学百科事典 (A *Cyclopedia of Bible Literature*)』 (1845年) にみられるテラフィム解釈を引用する ⁽⁴²⁾。

テラフィムの製作者たちは、長男を屠り、その首を切り落として塩漬けにし、香辛料と油で保存処理をした。この後、彼は金の板に不浄の霊の名と予言の文を書いて、壁に固定した頭部の舌の下に置き、その前に灯火を点し、ひざまずき礼拝すると、その舌が予言を発し始めた。 ⁽⁴³⁾

この記述では、テラフィムの作り方から儀式的詳細な内容までが、前章で引用した1884年5月31日付けの『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』の内容とほぼ一致している。『聖書文学百科事典』が出版されたのは1845年だが、その5年前にはロンドン・ユダヤ協会の新たな伝道教会の建設のために、エルサレムで発掘調査を行っている ⁽⁴⁴⁾。キットが1829年から1832年にバグダッドで布教活動を行っていることを踏まえると、19世紀中頃の英国では海外での伝道活動や、聖地を発掘する動きが活発になってきたことが伺える。

次に取り上げるのは、メソジスト教会の牧師及び学者でもある、ジョン・ウェスリー・エサリッジ (John Wesley Etheridge, 1804-1866) ⁽⁴⁵⁾ による『モーセ五書に関するオンケロス ⁽⁴⁶⁾ とヨナタン・ベン・ウジエルのタルグム；カルデア語のエルサレム・タルグムの断片』 (1862年) である。エサリッジはドイツやフランスなどヨーロッパ大陸に渡り、フランスのブローニュでメソジスト教会の牧師になるが、彼は晩年の1853年に英国に帰還するとコンウォールに居を構え、その間に『モーセ五書に関するオンケロスとヨナタン・ベン・ウジエルのタルグム；カルデア語のエルサレム・タルグムの断片』を英訳している。

注目すべきは、筆者が第2章で取り上げた『ミドラシュ・ピルケイ・デ・ラビ・エリエゼル』におけるテラフィムの記述とほとんど一致する内容が、『モーセ五書に関するオンケロスとヨナタン・ベン・ウジエルのタルグム；カルデア語のエルサレム・タルグムの断片』にも記載されている事実である。

彼らは男性、長男を殺してその首を切り落とし、それを塩とバルサムで漬けた。金の板に呪文を書き、それを頭部の舌の下に置き、壁に設置するとその首は彼らと語ったので、彼らの父は服従したのである。 ⁽⁴⁷⁾

『ミドラシュ・ピルケイ・デ・ラビ・エリエゼル』と同様に、上記の記述では「テラフィムとは、長男を生贄にして香辛料で保存処理を施したもの」と、「舌の下

に呪文を記した金の板を貼りつけると、テラフィムは人々と対話をする」という点が共通しており、テラフィムにされるのは必ず長男であることが分かる⁽⁴⁸⁾。

しかしユダヤ教では、偶像崇拜が禁止されていたのにもかかわらず、なぜ、ラビたちの中でテラフィムに関する自由な解釈が生まれたのかは不明である。加えて、「テラフィムの保存処理方法」や「テラフィムが未来を予言する」という解釈は、19世紀英国の一般人が日常的に使用する聖書にはみられず、ミドラシュやタルグムにしか記載されていない。おそらく、ラビやヘブライ語の研究者しか講読しえないような書物を通じて、人間を生贄にしたテラフィムに未来を伺うという秘儀的な慣習が伝承されてきたと推測しうる。

さらに、テラフィムについての記述はキットとエサリッジの著書だけにとどまらず、19世紀初頭のロマン派の詩人、ロバート・サウジー (Robert Southey, 1774-1843) の詩集にも見出すことが出来る。サウジーによる『タラバ、悪を滅ぼす者 *Thalaba the destroyer*』(1801年初版)は、イスラム教徒の主人公タラバが、悪の一団であるドムダニエルの魔術師と対決するゴシック・ロマンスである。サウジーは18世紀後半にフランス文学を中心に隆盛したゴシック・ロマンスの影響を受けていた。サウジーは中東からアフリカにいたるまでの旅行記を網羅しており、本作でその出典を明記している。ここで、主人公タラバの敵である魔女ハウラが「テラフ」に質問を投げかける第2巻26節から40節を引用する。

洞窟の脇にテラフがあった。それは生まれたての赤子の首。生まれたときにハウラが掴んで両肩からもぎとったもの。金の皿にのっており、その下に不浄な霊の名が刻まれていた。頬の色は死のどす黒さ、髪のない頭蓋の、死んだ頭皮もどす黒い。唇は青ざめていて、ただ目だけに命があり、悪魔的な光に輝いていた。

「告げよ！」ハウラは言った。「われら魔術の達人たちを脅かす火⁴⁹は消えたのか？」死んだ唇が動いて、答えた、「魔術の達人たちを脅かす火はまだ燃えている」⁽⁵⁰⁾

サウジーは、このテラフに関して、16世紀後半から17世紀のイギリスの教育者、学者であるトーマス・ゴドウィン (Thomas Godwyn, 1586/7-1642) による『モーセとアロン』(1641年初版)⁽⁵¹⁾と、1760年にライプツィヒで出版されたラビ・エカザール (Rabbi Ekazar) 『ラビ・アブラハム・エリザーの古い錬金術の書』の記述を引用している。

「ラビたちは次のようなばかげた想像をしている。人々は長男を殺し、首をもぎ取って塩と香辛料をまぶし、金の皿に不浄な霊の名を書いて、それに首をのせて壁の上に置く。そしてその前にロウソクを灯して拝んだのであると」

ゴドウィンの『モーセとアロン』

ラビ・エカザールでは子どもの首ということになっている。⁽⁵²⁾

サウジーはラビ・エカザールとトーマス・ゴドウィンの記述に基づいて、魔女ハウラと「テラフ」の間答の様子を創作したのであろう。タラバの敵である魔女ハウラが作った「テラフ」は、「生まれたての赤子」「金の皿にのり、不浄の霊の名が刻まれている」そして「どんな質問にも答える」ものであり、この3点が先述した8世紀から12世紀の二人のラビの記述と共通しているのである。

しかし、ウォーターハウスの《神託伺い》に描かれたテラフは、赤子というよりも成人に見え、また、金のプレートに不浄の霊の名が刻まれているか否かは判別できない。だが、『タラバ、悪を滅ぼす者』の内容にもあった通り、「テラフ」が「金の皿にのっている」こと「頬は黒く、髪のない頭蓋」という共通点が見出せる。19世紀初頭にサウジーがトーマス・ゴドウィンやラビ・エカザールの著作を参考にしてきた事実を踏まえると、聖書に精通した人々の間で「テラフ」に関する知識が敷衍していた事実が分かる。

だが、『第116回ロイヤル・アカデミー展』でのウォーターハウスによる《神託伺い》の説明を読む限り、ウォーターハウスを含めた多くのヴィクトリア朝の人々には、テラフ及びテラフィムに関する知識がなかったと思われる。そのため、ロイヤル・アカデミーの審査員や鑑賞者に理解を促すために、ウォーターハウスは本作に描写されたテラフの説明をする際に『タラバ、悪を滅ぼす者』⁽⁵³⁾もしくは、『聖書文学百科事典』と『モーセ五書に関するオンケロスとラビ・ヨナタン・ベン・ウジエルのタルグム；カルデア語のエルサレム・タルグムの断片』を参考にしと考えられる。

おわりに

ウォーターハウスの《神託伺い》以前の作品は《ホノリウス帝のお気に入り》のように古典的な題材を描く傾向にあった。それはアカデミーの重鎮であるフレデリック・レイトンやローレンス・アルマ＝タデマを中心に、ヘレニズムを主題とした作品が高く評価されていたからである。しかし、ウォーターハウスは彼らが主題とすることのなかった、ヘブライズムの「テラフ」と「ヘブライの女性祭司」を作品の題材にすることで、古典主義の画家と一線を画そうと試みたのではあるまいか。すなわち《神託伺い》を、当時アカデミーで描かれることのなかった「ヘブライの秘儀の慣習」を主題とした挑戦的な作品であると解釈することによって、ウォーターハウスのアカデミーにおける立ち位置を明確にしうると考えられる。

ウォーターハウスは、1880年代の英国では周知されていなかった、ラビにより伝承されてきたテラフィムを用いた儀式を《神託伺い》において具現化した。続いて彼は《マリामネ》(1887年)(図10)において、ヘブライズム的な題材を取り上げる。本作はハスモン朝末期の悲劇の王妃マリामネとヘロデ王の悲話を詠うパイロンの『ヘブライの歌』と、フラウィウス・ヨセフス著『ユダヤ古代誌』第15巻を典拠としている⁽⁵⁴⁾。ウォーターハウスが《神託伺い》と《マリामネ》を描いた背景には、当時のアカデミーにおけるヘレニズムとヘブライズムの対立拮抗を看取しうるのみならず、従来は指摘されてこなかった19世紀ヴィクトリア



図1 ジョン・ウィリアム・ウォーターハウス《神託伺い》1884年、カンヴァス・油彩、119.4×198.1cm、ロンドン、テート・ギャラリー



図2 ジョン・ウィリアム・ウォーターハウス《ホノリウス帝のお気に入り》1883年、カンヴァス・油彩、119×205.0cm、アデレード、南オーストラリア美術館



図3 ジャン=ポール・ローランス《後期ローマ皇帝ホノリウス》1880年、カンヴァス・油彩、153.7x108 cm、ノーフォーク、クライスラー美術館



図4 『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』5月12日、476頁。



図5 フレデリック・レイトン《糸巻き》1878年、カンヴァス・油彩、100.3×161.3cm、シドニー、ニュー・サウス・ウェールズ州立美術館



図6 フレデリック・レイトン
《ナウシカ》1878年、カンヴァス・
油彩、144×66.9cm、個人蔵



図7 ローレンス・アルマ＝タデマ
《神殿への道》1882年、カンヴァス・
油彩、101.5×52cm、ロンドン、ロ
イヤル・アカデミー・オブ・アーツ



(図8) ローレンス・アルマ＝タ
デマ《西洋夾竹桃》1883年、カ
ンヴァス・油彩、91.4×65.4cm、
個人蔵



図9 『マガジン・オブ・アート』1886年、5頁、テラフと女性祭司部分

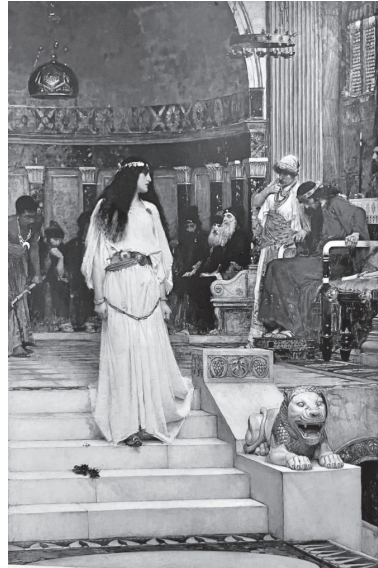


図10 ジョン・ウィリアム・ウォーターハウス《マリアマネ》1887年、カンヴァス・油彩、259×180cm、個人蔵

朝後期におけるユダヤ学の敷衍を示す作品と考えられるのである⁽⁵⁵⁾。

図版一覧

図版出典

(図1)《神託伺い》：ロンドン、テート・ギャラリー

<https://www.tate.org.uk/art/artworks/waterhouse-consulting-the-oracle-n01541> (2022年2月9日閲覧)

(図2)《ホノリウス帝のお気に入り》：アデレード、南オーストラリア美術館

<https://www.agsa.sa.gov.au/collection-publications/collection/works/the-favourites-of-the-emperor-honorius/25266/> (2022年7月17日閲覧)

(図3)《最後の皇帝ホノリウス》：ノーフォーク、クライスラー美術館

<https://chrysler.emuseum.com/objects/21557> (2022年11月30日閲覧)

(図4) *The Illustrated London News*, 12 May, 1883, p. 476.

(図5)《糸巻き》：シドニー、ニュー・サウス・ウェールズ州立美術館

<https://www.artgallery.nsw.gov.au/collection/works/1305.1990/> (2022年7月17日閲覧)

(図6)《ナウシカ》：ウィキメディア・コモンズ

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%95%E3%82%A1%E3%82%A4%E3%83>

AB : 1878_Frederick_Leighton_-_Nausicaa.jpg (2022年7月17日閲覧)

(図7)《神殿への道》：ロンドン、ロイヤル・アカデミー・オブ・アーツ

<https://www.royalacademy.org.uk/art-artists/work-of-art/the-way-to-the-temple> (2022年7月17日閲覧)

(図8)《西洋夾竹桃》：ウィキメディア・コモンズ

https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Lawrence_Alma-Tadema_An_Oleander.jpg (2022年7月17日閲覧)

(図9) *Magazine of Art*, Vol. 9, London, Cassell & Co., 1886, p. 5.

(図10)《マリムネ》：川端康雄『ウォーターハウス夢幻絵画館』東京美術、2014年、44頁。

注

- (1) “The Oracle or Teraph was a human head, cured with spices, which was fixed against the wall, and lamps being lit before it and other rites performed, the imagination of diviners was so excited that they supposed that they heard a law voice speaking future events.” 原文は以下のカタログに拠った。*The Exhibition of the Royal Academy, 1884. The 116th., exh. cat., London, Royal Academy of Arts, 1884, p. 24.* (本論文の翻訳は全て筆者による)
- (2) Anthony Hobson, *J. W. Waterhouse*, London, Phaidon, 1989 (Reprinted 1994), pp. 31-34. ; ピーター・トリッピ『J.W.ウォーターハウス』曾根原美保訳、ファイドン、2014年、60、80-83頁。[Peter Trippi, *J. W. Waterhouse*, London, Phaidon, 2002 (Reprinted 2014)].
- (3) タルグム (Targum) とは、「翻訳」という意味であり、その様式や制作時期は様々である。タルグムは、聖書のアラム語訳である。第二神殿時代 (1世紀) の終わり頃、ヘブライ語はイスラエルの地で話される言葉ではなくなり、この地域の共通語であるアラム語に取って代わられた。元来、シナゴグで律法の朗読の際にアラム語訳を朗読し、信徒がヘブライ語の文章を理解しやすくするためのものであった。やがて、これらのタルグミム (Targumim) は書き留められるようになった。最も有名なタルグミムは、異教徒のオンケロス (紀元1～2世紀) が書いたトーラーのタルグミムである。タルグムについては以下を参照。Barry Dov Walfish, “Jewish Bible study”, 2019, British library <https://www.bl.uk/sacred-texts/articles/jewish-bible-studies> (2022年10月16日閲覧)
- (4) 14世紀の注解者、メンヒム・ベン・ベンジャミン・レカナティ (Menahem ben Benjamin Recanati) がTargum Yerushalmiを、ヨナタン・ベン・ウジエル (Jonatan ben Uziel) の名にちなんでタルグム・ヨナタン (Targum Jonatan) と誤認したため、タルグム偽ヨナタンという名称になった。タルグム偽ヨナタンについては、以下を参照。Fred Skolnik (ed.), “Targums to the Pentateuch”, *Encyclopedia Judaica*, Second Edition, Vol. 3, Farmington Hills, Thomson Gale, Keter Publishing House, 2007, p. 591.
- (5) Elizabeth Prettejohn, Peter Trippi, Robert Upstone and Patty Wageman, *J. W. Waterhouse : The Modern Pre-Raphaelite*, London, Royal Academy of Arts, 2008, p. 98.
- (6) マリアン・ステューブンス「ロイヤル・アカデミー・オブ・アーツ1768-1918」堀川麗子訳、『ロイヤル・アカデミー展』カタログ、河村錠一郎監修、石川県立美術館／富士東京美術館／静岡市美術館／愛知県美術館、東京新聞、2014年、23頁。
- (7) “ROYAL ACADEMY EXHIBITION”, *The Illustrated London News*, 5 May, 1883, p. 438.
- (8) *The Exhibition of the Royal Academy, 1883. The 115th., exh. cat., London, Royal Academy of Arts, 1883, p. 19.*《泡》は現在所在不明であり、1883年のロイヤル・アカデミー展のカタログでタイトルと展示場所が確認できる。

- (9) ピーター・トリッピ、前掲書、2014年、51頁。
- (10) “FINE-ART ILLUSTRATIONS”, *The Illustrated London News*, 12 May, 1883, p. 471.
- (11) イギリスのヨークシャー州スカボロー出身のレイトンは、医者の子として生まれた。1840年にレイトン一家はローマへ移住しており、レイトンは青年期からイタリア語、ドイツ語、フランス語など語学が堪能であった。1864年にアカデミー準会員、その2年後の1868年に正規会員に異例の速さで選出される。1896年1月24日に画家として初の爵位を授与されるものの、その翌日1月25日に狭心症のため死去する。
- (12) 本記事にはウォーターハウス、ハーバート・ギュスターヴ・シュマルツ (Herbert Gustave Schmalz, 1856-1935)、ルイーズ・ジェーン・ジョプリング (Louise Jane Jopling, 1843-1933) のように、アカデミーの会員でない画家も取り上げられている。
- (13) 女性画家ジョプリングの《土曜の夜》は、赤子を胸に抱いた母親が小さな娘と共に大衆食堂を訪れている一場面である。本記事を執筆した記者の説明によれば、貧困層の親子は、収入の全てを酒代として消費してしまう父親を探していると記述されている。ジョプリングはアカデミーのカタログにて、“Pay night, Drink night, Crime night” 「給料の夜、飲酒の夜、犯罪の夜」という一説を加えており、本作がヴィクトリア朝の貧困と犯罪を象徴している作品であることが伺える。
- (14) 作品の説明については以下を参照した。<https://artuk.org/discover/artworks/the-foolish-virgins-too-late-ye-cannot-enter-now-81434> (2022年12月4日閲覧)
- (15) 谷田博幸『唯美主義とジャポニズム』名古屋大学出版会、2004年、213頁。
- (16) 1876年にロイヤル・アカデミー準会員、1879年に正規会員に選出される。アルマ＝タデマの描く女性像は「トーガを着たヴィクトリアン女性」と称賛された。彼は1863年以降にギリシアやローマ、ボンベイ、さらには中近東の遺跡を訪れ、考古資料に基づいた作品を制作しており、「紺碧の海」と「大理石」の表現は右に出る者はいないと称賛された。
- (17) 河村錠一郎監修、前掲カタログ、2014年、108頁。
- (18) Anonymous, *The Illustrated London News*, 22 August 1885, p. 194.
- (19) Blaikie, J.A., “J. W. Waterhouse, A. R. A.”, *Magazine of Art*, Vol. 9, London, Cassell & Co., 1886, pp. 5-6.
- (20) “Consulting the Oracle”, *The Art Journal*, London, Virtue & Co., 1909, pp. 15-16.
- (21) ヘンリー・テートは砂糖の精製業で財を成した実業家であり、ウォーターハウスの《シャロットの姫》(1888年)やジョン・エヴァット・ミレイによる《オフィーリア》(1851-52年)を購入している。
- (22) ウォーターハウスは1884年『ロイヤル・アカデミー展』のカタログで、祭司がテラフィムの前で「ひざまづく」という行為は記載していない。
- (23) This picture, by Mr. J. W. Waterhouse, has been admired by many visitors to the Royal Academy Exhibition. [...] The word "Teraph," in the Syriac language, means the answerer of questions, or an oracle. We learn from the Dictionary of the Bible, above referred to, that "the makers of Teraphim slaughtered a man who was a first-born, cut off his head, salted it, and cured it with spices and oil. After this, they wrote the name of an impure spirit, and sentences of divine purport, on a golden plate, which they placed under the tongue of the head : it was then fastened to the wall, and lighted lamps were placed before it, and they knelt down in front of it in adoration, upon which the tongue began to utter divinations." There are one or two more short descriptions of the Teraphim, under the same heading, one of which says that "the Teraphim were human figures, by which the imaginations of diviners was so excited that they supposed that

they heard a low voice speaking future events."Mr. Waterhouse has treated this scene with much power of dramatic grouping, attitude, and expression : while both the Arrangement of his composition and the effect of his rich and brilliant colouring make the picture one of high artistic merit. 原文は以下に拠った。"Consulting the oracle" The Illustrated London News, 31 May 1884, p. 523.

- (24) 本書は全三巻で構成されている。このうちテラフィムの見出しがあったのは第三巻であるが、『士師記』『創世記』などが主たる内容に当たるため、ラビ文学にみられるテラフィムの生贄に至るまでの過程やその保存処理方法についての記述はない。
- (25) またニューヨークとボストンでは『ウィリアム・スミス博士の聖書辞典：古代史・伝記、地理、博物学 (*Dr. William Smith's Dictionary of The Bible : Antiquities, Biography, Geography, And Natural History*)』全四巻から成る辞典が1872年から88年にかけて出版されている。
- (26) 米倉充によれば、『創世記』のヤコブ物語に登場するテラフィムは、ウガリット神話におけるパール神を示しているとの解釈もなされている。米倉充「Ⅲヤコブ伝承 ヤコブの脱出」『創世記 旧約聖書入門』人文書院、1984年、192-197頁。
- (27) 『列王記』下巻23：24『聖書 新共同訳 旧約聖書統編つき』日本聖書協会、2009年、620頁。
- (28) 「口寄せ・霊媒」は、『申命記』でも強く批判されている。高井啓介「女性高齢術師と女性預言者—旧約聖書における媒介者の正当性について—」『霊と交流する人びと 媒介者の宗教史』下巻、リトン、2018年、83-105頁。
- (29) 『エゼキエル書』21：26『聖書 新共同訳 旧約聖書統編つき』日本聖書協会、2009年、1328頁。
- (30) 『ゼカリヤ書』10：2『聖書 新共同訳 旧約聖書統編つき』日本聖書協会、2009年、1490頁。
- (31) その他に、『サムエル記』19：13,16においては、ダビデの妻ミカルが、サウル王の刺客から夫を守るために、人間と等身大のテラフィムを彼の寝台に置いている。『旧約新約聖書大辞典』では、ダビデの代わりに置かれたテラフィムは、神の象徴である祭儀用の仮面であった可能性を指摘している。G.Fohrer、渡辺和子「テラビム Teraphim」『旧約新約聖書大事典』旧約新約聖書大事典編集委員会編集、教文館、1989年、797頁。
- (32) タルムード時代のイスラエル／バビロン、630年頃～1030年頃に書かれたミドラシュのひとつ。創世記からミリアムのハンセン病の話まで、律法の物語を語り、発展させた贖罪、メシア、終末の時期の予測などの議論を盛りこんでいる。従来、ミシュナの時代（1～2世紀）にラビ・エリエゼル・ベン・ヒルカヌスが著したとされていたが、8～9世紀に編集されたものと思われる。<https://www.sefaria.org/texts/Tanakh/Targum>（2022年9月15日閲覧）
- (33) ラビとその著作に関する呼称については、ユダヤ学研究者の市川裕先生に指導して頂いた。
- (34) ミドラシュについてはSefariaを参照した。ミドラシュは、聖書のテキストを解釈・推敲した文学の一種で、主に紀元5世紀から中世にかけて編纂されたものである。このカテゴリーの本は一般的に、聖書の物語の空白を埋めるなど、解釈の方法が共通している。タルムードには、ミドラシュの部分が頻繁に登場する。<https://www.sefaria.org/texts/Midrash>（2022年11月30日閲覧）
- (35) カッコ内の文言について、クレインは詳しく述べていない。テラフィムを製作する際に道具を使用して人間の頭部を貫通させたという解釈なのか、それとも頭部に満遍なく塩と香辛料をまぶしたという意味なのか、判別できない。
- (36) The first tradition, found in the Midrash Pirkei de Rabbi Eliezer, explains that they slaughtered (from his front and back) a human firstborn and pickled his head with salt and oil. Then, they took a golden plate, wrote the names of impure spirits upon it, and

placed it under the slain firstborn's tongue. Finally, they affixed the head to a wall and it would talk with them. 原文は以下に拠った。Rabbi Reuven Chaim Klein, *God Versus Gods: Judaism in the Age of Idolatry*, California, Mosaica Press, 2018, p. 361.

- (37) 著者のクレインが本文中で「(dead?)」と記載しているので、そのまま訳出した。
- (38) A second tradition is found in the work *Midrash Lekach Tov* by R. Toviah ben Eliezer (an 11th- to 12th-century Greek Rabbinic figure) . He writes that first they immersed a (dead?) person in oil for many days until his skin dissolved. Then, they grabbed the hair of his head and pulled it in a way that would detach his head and lungs from his body. Afterwards, they stood the corpse up and an impure spirit would appear to be resting upon on it. It was able to foretell the future through magic and would respond to any question posed to it. Klein, *op. cit.*, p. 361.
- (39) ジョン・ペンブル著『地中海への情熱—南欧ヴィクトリア=エドワード朝のひとびと』秋田教子、加藤めぐみ、渡辺佳子訳、国文社、1997年、243頁。
- (40) 同上、243-244頁。
- (41) キットについては以下を参照。<https://findingaids.library.emory.edu/documents/P-MSS270/> (2022年12月4日閲覧)
- (42) ジョン・キットの著作『聖書文学百科事典 (A Cyclopedia of Bible Literature)』の一次資料については、19世紀文芸評史研究者の井口俊先生にご教授頂いた。
- (43) The makers of teraphim slaughtered a man who was a first- born, cut his head off and salted it, and cured it with spices and oil. After this, they wrote the name of an impure spirit, and sentences of divination on a golden plate, which they placed under the tongue of the head, which was fastened to the wall, and lighted lamps before it, and knelt down in adoration, upon which the tongue began to utter divinations. 原文は以下に拠った。John Kitto (ed.), "Teraphim", *A Cyclopedia of Bible Literature*, Vol.2, Edinburgh, Adam and Charles Brack, 1845, p. 845.
- (44) ジョン・ペンブル、前掲書、1997年、243頁。
- (45) エサリッジは、独学でギリシア語、ラテン語、ヘブライ語、シリア語、フランス語、ドイツ語を習得した人物である。
- (46) オンケロス は 1 世紀から 2 世紀に生きたローマ人であり、ユダヤ教に改宗したと伝えられている。彼はタナハをアラム語に翻訳した。また、タナハをギリシア語に訳したアクィラス (Aquila) という名の改宗者と同一視する説もある。Sefariaを参照。<https://www.sefaria.org/topics/onkelos> (2022年12月1日閲覧)
- (47) For they had slain a man, a first-born, and had cut off his head ; they salted it with salt and balsams, and wrote incantations on a plate of gold, and put it under his tongue, and set it up in the wall, and it speak with them ; and unto such their father bowed himself. 原文は以下に拠った。John Wesley Etheridge, *The Targums of Onkelos and Jonathan ben Uzziel on the Pentateuch ; with the fragments of the Jerusalem Targum from the Chaldee*, London, Longman, 1862, p. 265.
- (48) なぜ長男だけが生贄にされるのか、今回の調査では明らかにすることができなかった。
- (49) 「火」とは、主人公タラバのことを示唆する。
- (50) ロバート・サウジー『タラバ、悪を滅ぼす者』道家英穂訳、作品社、2017年、25頁。[*Thalaba the Destroyer, Robert Southey : Poetical Works 1793-1810*, Ed. Tim Fulford. Vol. 3. London, Pickering and Chatto, 2004.] .
- (51) 道家はサウジーが引用したゴドウィンの著書として以下を参照している。*Moses And*

Aron : *Civil and Ecclesiastical Rites, Used by the ancient Hebrews*, London, 1641, pp. 2-26.

- (52) ロバート・サウジー、前掲書、2017年、194-195頁。
- (53) サウジーの『タラバ、悪を滅ぼす者』は1801年に出版され、1809年に改訂版が発行されたことまでは、現段階でわかっているが、その70年以上あとの1880年代に重版されていたのか、当時の新聞や雑誌の記事を精査中である。
- (54) 《マリムネ》の典拠となる文学作品については、以下を参照。Elizabeth Prettejohn and Peter Trippi and Robert Upstone and Patty Wageman, op. cit., 2008, p. 108.; トリッピ、前掲書、2014年、82頁。
- (55) 今後の課題としては、バイロンの詩集とフラウィウス・ヨセフス『ユダヤ古代誌』を参考にしつつ、ウォーターハウスが《神託伺い》を契機に《マリムネ》のようなヘブライズム的な作品を再び描いた経緯を明らかにしていきたい。さらに、同時代の画家であるエドウィン・ロング (Edwin Long, 1829-1891) の《エステル妃》(1879年) と1885年から86年にかけて制作した「エフタの物語」の3連作を分析の対象に加えることを、今後の課題とする。